第3回神戸女流文学賞受賞作品

夢の消滅 5

大原 由記子
え・南 和好

「そんなに私が好きなの」

Sは蠟燭の火をTに近づけながら笑った。細い糸のような笑いだ。いつかあの笑いに首をしめられそうな気がするとTは言ったことがある。Sに何度か振られる度に執念深くSを追いかけるようになったT。確かSと同じ年だったと思う。色の白い少女のような男の子だった。

町会議員の息子できれいな手をしていた。それから他に誰がいたろうか。Yがいた。Mと同級生の女の子であれから二年もしない内に白血病で死んだ。

あの日Sの十六歳の誕生日を祝って薄暗いSの部屋でパーティーを催していた。どんなプレゼントもSはよろこばなかった。ただ不機嫌にブランデーを飲んでいた。その内Yは活けてあった白薔薇の棘で指頭に傷をつけ、Sのブランデーグラスに血をたらした。

「このくらいSが好き」

Yはえくぼをつくって言った。Sはにんまりと笑ってYを見つめ、そしておもむろにTに向って「あなたはどのくらい私が好きなの」と尋ねた。限りなくやさしい声で。

Tはかなり酔っていて言葉の意味ものみこめぬまま、よろよろと立ち上がり壁に飾ってあったナイフをふり上げた。その瞬間手がすべりナイフで小指を切ってしまった。ナイフをふり上げてどうするつもりだったのかT自身にもわからぬまま、白薔薇の花びらを血で染め、Sに渡した。鬱々と狂気が発酵していくがごとく血の匂いがMの意識をもうろうとさせ、もうろうとする意識のなかから不快と快が波のようにMを浸した。

「血の赤がいちばん赤らしくて好きよ」

MはSを心理的に圧迫する。何かあなたもするのよ、と。

「きれいなのは今だけ。すぐに赤黒くなってしまうわ」

「M、美しさなんてそんなもの。瞬間のものよ。一瞬の光芒こそ価値がある。他のだらだらとした時間は無いに等しいのよ」

Mはソファーに凭れてチェリーブランデーを嘗めた。Mという曖昧な存在がSの愛の手で位置づけられる。Sの甘い言葉で溶かされていくのをMは感じた。爆薬の近くで燃えている蠟燭のようなあたたかみのある言葉である。

MはTの血のりのついたナイフを手にした。不思議な輝きでそれは輝き、Mに挑みかかる。これほども冴え冴えとおまえは輝くことができるだろうか、私ほど挑発的な存在があるだろうか、手にしたナイフはそう言ってるようだった。Mはしびれるような痛みを手首に感じた。瞬間Sのことも、M自身の存在も考えてはいなかった。蠟燭の火のなかできらきらと輝くナイフの冷たい感触が手の平にあっただけだった。Sの部屋の赤い絨毯に（そのときは暗さのなかで黒い絨毯にみえていたが）ぽたぽたとMの血は吸収された。乾き切った砂漠のように毛足の長い絨毯はよく血を吸った。

Yはおろおろと部屋の電気をつけて青ざめた顔でMを見つめた。Tはアルコールに泥酔したのか、血の匂いにむせたのか、吐き気をもよおし口を両手でふさいでいた。そのなかでSは冷静に傷口をブランデーで消毒した。

「Mって恐ろしいわ。何をしでかすのかまるでわからないもの」

さほど心配でもなさそうな顔でSはMの手首に花柄のスカーフを捲いた。

「Sのためにこんなことしたんじゃないわ。自分のためよ」

父は髭もそらずにMのベットの横で手を握っていてくれた。静かな空気のように柔らかな存在だった。

「量をまちがえたの、ごめんなさい」

真新しい包帯でまかれているMの左手に父は頬をつけた。

「何が不満だったんだ。まだ君は十三歳になったばかりで苦しいことなんてないはずだ」

年なんて関係ないのよ。Mは心のなかでつぶやいた。言葉にするのはめんどうだった。はえが鈍い羽音で頭のなかを回っているようだった。

父は泣いてるようだった。左の手の平にあたたかな父の涙が伝わった。

「もうこんなことしないね」

「ええ」

実桜はつい昨日のことのように思い出す。
「君は陽気なニヒリストだな」
父は十三歳の娘にウイスキーを注ぎながら言った。少女は大人っぽくふふっと笑った。

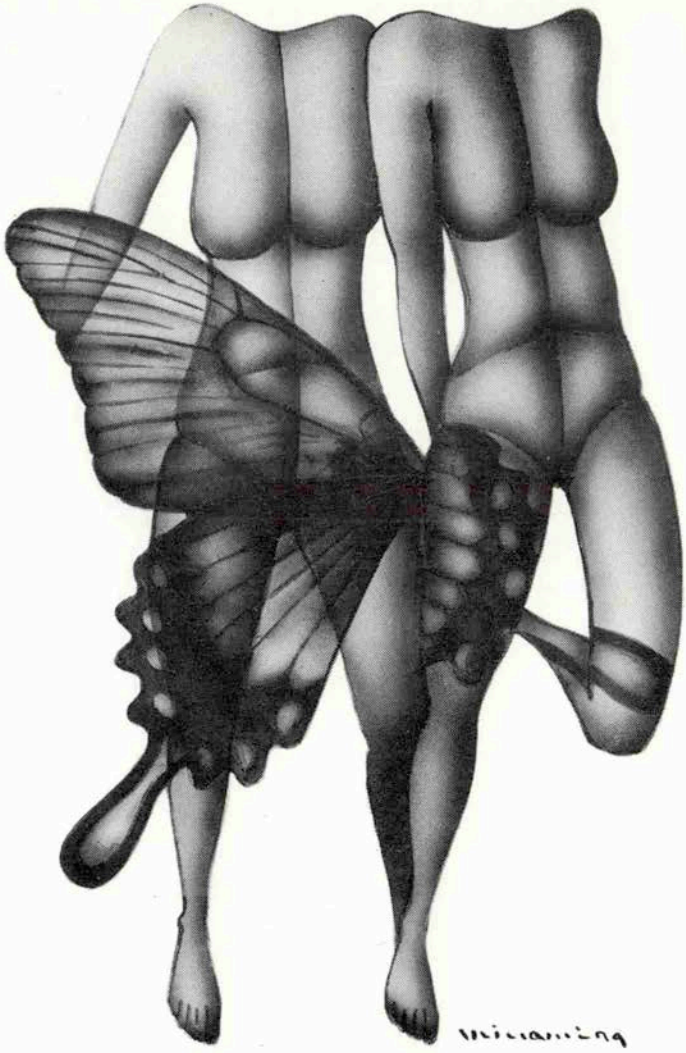
やはり帰ってしまったのね。冴子は灯のついてない部屋を見回した。前のビルのネオンの灯が部屋を赤く染めていた。デスクの上には書きかけの原稿用紙が乱雑に置かれていた。それはMとSとKの愛の物語だ。冴子は服を脱いでシャワーをいっぱい出した。湯がじゃあじゃあと体の上をはねる。

「あなたたちをぼくの絵のモデルにしたいんだ」
「いいわよ。Mには私から言っとくわ」
「否Mはいらない。Mのイメージがあればあなたとぼくで絵はできる。彼女をまきこみたくない」
「そう」
Sは気がなさそうにKの愛撫をうけている。
「M、どうしてる」
「帰ったり帰らなかったり。あなたがいないとぼくに寄りつきもしないよ」
Kの緩慢な指の動きがSの筋肉をほぐしている。
「早く彼女をものになさい。救ってあげられるのはあなただけよ。でないと私が彼女をダメにしてしまうわよ」
「あなたはぼくの救いがいらないのか」
「いらないわ。Mを支配し破壊すること。それが私の愛。でもねMを支配しようとしても、Mはいつも私の手のなかをほろりと抜け出してしまう。しかたなく私たちは絡み合ったまま闇に引きずり落ちていく。私はMに瞬間の幸福しか与えられない。瞬間の消滅、死とひきかえにする欲望。でもあなたはMにぬるま湯だけど安らぎとゆとりのある生活を与えられる」
「あなたに与えたい。ぼくにはあなたが必要だ。SがいるからこそMを愛していることもわかる」
「やっと認めたわね、Mを愛してること」
「ああ、あなたたちを愛してるとも。今描いてる絵はあなたたちの分身だ」
「Mを連れて行きなさい。きっと彼女はあなたに従うわ。今ならMをこの地獄から救い出せるかもしれない。しかしMはどんな安らぎも捨ていつかは黒い蜜を嘗めに、また私のもとへもどってくるでしょうけど」
冴子は一央の首に両手を回し、耳に熱い息をふきかける。
「K、あなたのやさしい言葉と冷たい観察者の目と膚の匂いがすき」
「S、あなたのかわいた言葉と火のような目と体がすきだよ」

冴子は厚手のツィードのコートをはおり外に出た。シャワーの温水がまだ体に残っていた。時計をのぞくと十二時をかなり回っていた。雪がまた降り出していた。こんなふうに襟を立て雪の街を歩くことが昔は大好きだった。Mの癖だったかもしれない。雨の日には傘もさずびしょ濡れでSを待っていたM。影響していたはずのSがMに影響されていたのかもしれない。
人出はほとんどなくときおり酔っぱらいが冴子をからかう。しかし冴子がきっとにらむと男は気味悪気に立ち去る。通りを隔てたタクシー乗場へ急ぐ。
雪がぽろぽろと肩にかかる。
自然の荒々しさを身近かで感じるとき、懐しさのようなものに冴子は襲われる。神秘的な感触に包まれる。肉体を持つ前、魂だけであったとき、私は風や光や雪のなかで身軽に存在していたのではないかと、私という魂は別の魂といっしょになり、より大きな生命に吸収され、自然という体のなかで息づいていたのではないかと、思えるのである。肉体などという重い鎧に閉じこめられたために、魂をひきずって地上をぶらぶら歩かなければならないのだ。

「大原の里」
「今からかね。この雪のなかを」
中年の運転手は冴子には聞こえない声でぶつぶつと不満をもらした。
そのくせ冴子は自然の不作法な荒々しさや必要以上のやさしさを嫌っていた。耳を切るような風の冷たさはもっと激しく乾いているべきであるし、西の空を焦す夕陽は吸い取り紙に赤インクを撒いただらしない広がりではなく、見る者の心を孤独と倦怠で染めあげる赤さでないといけないと思っていた。
庭づたいにベランダから実桜の部屋のサッシを開けた。実桜はロッキングチェアーを揺らしながら膝に置いた紙に走り書きしていた。実桜の横顔が左右に揺れていた。声をかけることがためらわれて、冴子はそのままベッドに坐った。クリーム色の壁にはビアズレーめいた実桜の絵が一枚さがり、一面鏡の前には白い薔薇が活けてあり、机の上は使わないらしく本が乱雑に並べてあった。実桜は小鳥のようにぶつぶつつぶやいていた。絨毯の上には書きかけの紙があちこちに落ちていた。

Poe の黄金郷へ
赤く輝く光をうけ船に乗った
酒の香は強く



はるかなる旅へと誘った
気が遠くなるほどの沈黙が続く
黒々と血潮を流す海の雄叫びを
暗き入江に向かう
白き鳥たちの奇しき鳴き声を
いつか耳にしたかもしれない
波間に浮かぶ木々は
コルクよりも軽く黙々と漂う
細胞の抜け殻に水はぬるむ
盲しいの朧げな恐怖に似て
甘く　夢なお遠い黄金郷の
魔酔に行き先も定かではない
淀りのなかにも
神秘な濁り絵があり
蒼白な宮殿を描く
華やかに装える光と影のなか
飛び迷う風が
古しえの匂いをはこんでくる
白い衣装をつけ
うとうと微睡んだ月の姿も
黄金郷に懲るとき
亡霊のように淡い
黄昏の昂揚を畏れた君主も
爛れる果実の豊満さに
生気を残す泉に影なす
夕陽のあでやかさに
金色の大理石に凭れかかったという
船は怪しく揺れる
気が遠くなるほどの沈黙が続く
・・・
雄しく続くポーの流麗な文体は
何処とも知れぬ黄金郷への
案内状として
今　届く

冴子はもう一枚目を通す

黒い絨毯
目につもる黒い絨毯
闇をはらはらうめていく
こそばゆく
長く
けだるく
からむ
細かな繊維の
かぼそさ
恐ろしさ
何かしら言いしれぬ底の深さ
それとなく毛をむしる
指の白さ

実桜は伸びをしてペンを置いた。
「M、詩集でも出すつもり」
「いつからいたの。文学の宿題よ」
実桜はベッドにもぐり込む。
「今はダメ、宿題を済ませなさい」
「もういいのよ」
実桜は冴子の背中に抱きついて胸をまさぐる。
「M、熱っぽいわよ」
「いつもこんなものよ」
「私がいないとき毎夜何してんの」
「Sのこと考えて、お酒飲んで、夢見てる。この間は夢のなかにKが出てきたわ。Kとキスしたの」
「こんな風に」
冴子は少し荒々しく実桜の唇を吸った。
「ちがうわ」
実桜は冴子の頬に軽くキスした。

〈つづく〉

●神戸っ子トラベルコーナー

★有川博とともにアメリカ西海岸・ディズニーランドの旅8日間
6月の眩しい太陽、輝く空、海、アメリカ西海岸は新しい季節。
日程／6月2日〜6月9日
費用／¥228,000
ディズニーランドホテルでハリザ・スペシャルナイト〈を開催。ソーシャルな装いでご参加下さい。

ディズニーランド

お問合せ・お申込みは**LIZA本部**（センタープラザ7階☎391−6801　荒木まで）

★第9回兵庫県青年洋上大学
日程／8月26〜9月9日
訪問国／中華人民共和国（北京、天津、上海、南京の各市）
使用船／コーラル・プリンセス号
募集人員／415名
参加経費／¥200,000
申込み締切／5月25日まで　**兵庫県青年洋上大学実行委員会事務局**（生田区下山手通4）☎351−2801

★ヨーロッパ美術の旅
名作「旅愁」の舞台ベネツィア、ルネサンス文化の花が咲き誇った町フィレンツェ、「ローマの休日」を楽しんで、超一流ファッションのオンパレード「スペイン階段」付近へ……。欧州の素晴らしさを
日程／6月21日〜30日
費用／¥398,000
大阪→パリ→ベネツィア→フィレンツェ→ローマ→パリ→大阪
お問合せ・お申し込みは**大丸トラベルサロン**（大丸神戸店地階）☎331−8121
または**西宮市大谷記念美術館**☎0798−33−0164まで

★ソ連老人福祉視察の旅13日間
日程／8月3日〜8月15日
費用／¥265,000
敦賀港からオルロア号で出発、ナホトカ着後は特別列車やソ連航空で各地を回ります。ハバロフスク、モスクワ、トビリシ、ミンボーディー、ベチゴルスク等を訪問。
お問合せ・お申し込みは**日ソ協会兵庫県支部**（神戸国際会館3階、251−4534）

★ブリティッシュ・コロンビア大学夏期英語留学50日間
日程／7月10日〜8月29日
費用／¥435,000

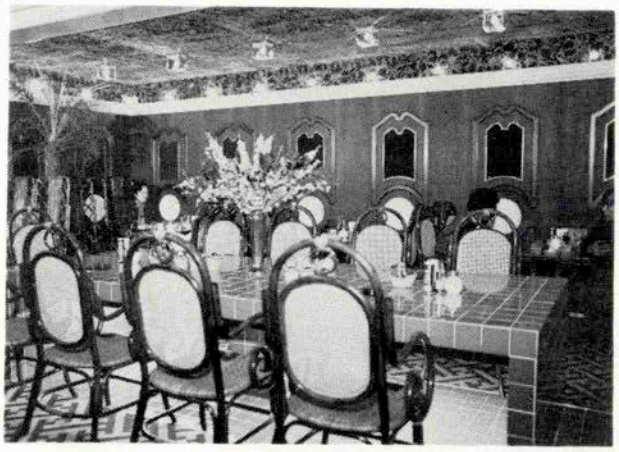
★サーファーは新しいヒーローだ
君は本物の波のうねりを知ってるか？　ハワイツアー4泊6日
出発／5月22日、6月8日、7月4、6、25日
費用／¥139,000
お問合せ・お申込は**トップナッチ**
葺合区琴緒町5の7の1グリーン・シャポー7F
☎242−2695　中岡まで

★魅惑のカリブ海クルーズとニューヨークハーバーフェスティバル観覧ツアー18日間
コスタラインのMSワールドルネッサンス号がご案内
日程／6月16日〜7月3日
費用／¥680,000
東京→ロスアンジェルス→マイアミ→ポートアントニオ→パナマ→カルタジェナ→カラカス→アルバ→マイアミ→ニューヨーク→東京

クルーズ・コース

お問合せ・お申込みは**ドッドウェルトラベルサービス**（大阪市西区京町堀1−3−13辰巳ビル）担当島村☎06−443−8721

トア・ロードの昼と夜を　**パウリスタ**　の優雅なサロンで



神戸市生田区三宮町2丁目34（パウリスタビルB1）
TEL 078・391・0061

営業時間／午前10時〜午後8時30分
第1・第3水曜日定休

第3回神戸文学賞受賞作品

自由と正義の水たまり

第5回

蒼竜一
え・小西保文

尓は時計を見、立ち上がって閲覧室に入って行った。先日故郷に父の墓参をした折に目にした（れいぜいばし）が記憶に残っていて、暇つぶしに調べて見る気になったのである。

橋のある三木市細川中町は昔の荘園地図に於て、播磨国細川荘とちょうど重なり合う位置にあった。その時は、静かな喜びにも似た気持の昂揚を感じた。また荘園史料には、細川荘は大覚寺門跡領なり、藤原定家其の地頭職を領して、正元中、之を長子為氏に譲る、文永十年、為氏不孝のこと有りと称して、之を奪い、二子為相に与ふ、正和二年、二家其の領有を争ひ、之を鎌倉に訴へ、遂に為相に帰せり、とある。以後細川荘は冷泉家の所領となるが、定家十三世の孫、近世儒学の祖と言われる藤原惺窩生誕の地ともなる。

阿仏尼の「十六夜日記」は、之を鎌倉に訴へ、の即ち道中日記として知られている。尓は、之を長子為氏に譲るの前あたりに、父為家の名前を主語として書きおいてくれた方が親切ではなかったのかと思ったりしながら、冷泉家文書を拾い読みしていた。そしてまた「十六夜日記」を開けて見たりしている内に、ソフィのことが気に掛り始めた。阿仏尼からソフィに連想が及んだのである。をしからぬ身ひとつはやすくおもひつれども、子を思ふ心のやみはなほしのびがたく、道をかへりみるうらみはやらむかたなくて、・・阿仏尼が吾が子のために鎌倉下向を思い立ったように、ソフィはどんな理由で日本観光を思い立ったのであろうか。尓は何時の間にか白人女のソフィが阿仏尼のような気がし、阿仏尼が色白の肌を持ったソフィのような、ふっくらとした女のような気がし始めていた。

日が暮れ、尓は外に出た。

街を歩き、屋台で酒でも飲むかそれとも家に帰って気まずい思いをしながら飯を食うか、二つに一つを迷っていた。尓はふと、自分がこんな生活を送っているなどとは、ソフィは想像さえ出来ないのではなかろうかと思った。帰国すれば、それ相応の地位が保障されて居る東南アジアの留学生とまでは行かなくても、無資格のガイドをやり、日銭をもらっているような生活を想像出来るであろうか。日本の国は巨大な精密機械のようなもので、一度歯車を食出した者には、もう入り込む余地はないのだ。彼は自らを省みて、もう突っ張れないのかと思った。闘牛士が華やかだった昔の自分を惜しむ（花形だった若い頃の写真を飾って闘牛場でガムを売っている男達の）ように、寂しげな気持で自分を眺めた。何もかもに突っ張っていたい時期があった。あれは世の中に対して

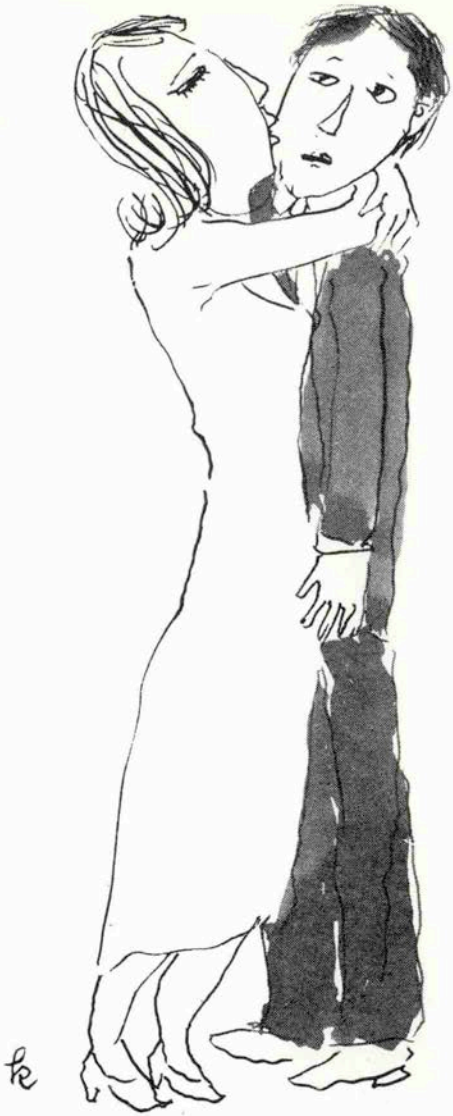
だったか。時の流れ――それは彼の若さをも押し流して行くどうしょうもないものに対してだったのか、とにかく彼は変に突っ張っていた時期がある。その頃、尓は父へ宛てた手紙の中で、なんとかして生の証が欲しい、この世の中に自分の爪跡（歯向い引掻くつもりでいたのだろうか）を残さずには死んでも死にきれないと書いたのを憶えている。昼は学校、夜は働き、土曜と日曜日には日雇いの庭師の助手としてF百十度を越えるサンファナンド・バレーの方で働いた。あの暑さは、一体何だったのだろう。燃え尽くすような気持の昂揚は、肉体的にはストイックな生活と相俟て何時迄も持続しそうな力を身内に感じさせた。それはごつごつして居て熱っぽい、日本で感じた事のない異国的な力であった。むしろ攻撃的でさえあった。そんな力も日本に帰ると、気の抜けたビールのようにあっけなく雲散してしまっていた。

結局は尓は屋台で金を使わないように酒を飲み、帰りにレコード店に立ち寄った。ソフィへの贈物に日本のレコードを買おうと思ったのである。彼女がいろんな国のレコードを集めることに熱中していた時期があったのを思い出したからであった。だが彼は、LP盤を買うのに充分な金を持っていなかったことに気付いて、大盤のレコードを持ち帰れば妻が怪しむだろうと云うことを理由にこの買物を断念した。その代り、二枚の童謡をドーナツ盤で買った。まだ日本に住むことになるものとも、米国のものとも分らぬ吾が児に一枚、そして急に寝顔が見たくなった赤ん坊に一枚、同じのを買った。ジャケットに描いてある二匹のトンボが、レコードを掛ければくるくる廻るような気がした、それだけの理由でである。

尓がアパートに帰ると、妻はテレビを見ながら赤児に哺乳壜のミルクを飲ませていた。別にお帰りなさいと云う訳ではない。でも機嫌は昨日あたりよりは大分ましな方だと妻の顔色を窺いながら、尓は冷御飯に熱いお茶を注いでおいて、冷蔵庫から漬物を出して刻んだ。

「今日は出かけたのか」

部屋に籠っている香水の匂いと漬物の臭いが混じり始め、尓は何とも言いようのない気分になった。もうつく



づく、こんな暮らしと思った。
「そうよ、社長さんまた何とか仕事くれそうだわよ。でも二度とこの間のようなことをしてくれたら困るって言ってたわ。私が取り成しておいたからいいようなものの……」
妻は社長さんと言ったが、今度は別に撲り掛りもしないで、彼はただ、
「そうか、たすかるよ」と応えた。その言葉は、急速に今夜の妻の機嫌を直した。妻の機嫌が治ると、その分だけ彼の気持が沈んでいった。しかし、彼はそんな素振りも見せずに「心配しなくていいんだよ。無理をしなくたって。仕事をどうしてもくれないんだったら俺だって働くよ」
言ってしまってから、尓はどう云う理由で自分が妻に無理をしなくたって、と言ったのか一瞬不安になった。しかし、彼女は無頓着に「働くって、どんな仕事が出来るのかしらね」と立って来て、お茶漬を啜る彼の肩に手を置いた。香水の匂いが強い。きっと妻の社長さんは、この香水の匂いに歯の浮くようなお世辞を言ったであろうと思い、また彼女の身の熟しから暫く疎遠になった儘の夫婦仲を今夜あたり、彼女は急に取り戻したいと望んでいるのじゃなかろうかと思いながら、尓は音を立ててお茶漬を啜った。
「あなたは今のお仕事しか出来ないわよ。そのうちに正式の資格をとって、独立したらと社長さんだって言って下さってるんだし、それが一番よ」
「仕事はあるさ、バンコクに帰った奴に、日本で言えば自治省の局長クラスになっている友達も居るんだし……」
妻は、笑った。尓は多少、自分が滑稽だとは思いながら、今しがた図書館で隅から隅まで目を通してきた新聞にあった求人欄、倉庫要員求む、身体頑健云々。不動産会社営業部員、自動車の免許ある方、高給優遇。男子清掃責任者班長、六十歳位迄等の記事が、鮮明に脳裏に甦ってくるのを感じた。
「明日はお仕事あるかも知れないって——、お風呂を沸かしておいたから、あなた早く寝みましょうよ。また新規蒔き直しだわよ」
尓は、妻の明日と云う言葉にたじろいだ。
次には何が新規蒔き直しなものかと、反発を覚えたが、その言葉の裏にあるものを察して風呂には入ることにした。しかしどちらかと言えば、風呂の中で明日のことをゆっくり考えたいと思ったのである。
翌朝。朝から春には暑すぎる程の陽差しがカーテン越しに狭い部屋を染めている。彼はずいぶん早くから目を覚していた。妻にソフィのことを何も話さないでここ数日間を過ごしたことが、不思議なことのような気がする。
何事もないこの平安な明るい陽差しが、何時迄も続いて行くようで、また嘘みたいに束の間のものであるような気もする。妻はいつの間にそうしたのか彼に背を向け子供を抱くような形で丸くなって眠っている。上半身を起した尓は、彼の妻と彼の子供の寝姿を眺めている。尓の心は、この時限りなく優しくなっていた。朝の陽は、明るく彼等の周りにある。
突然、電話のベル。
彼は妻を起さないように間髪を入れず、受話器にとびついた。
旅行代理店のおやじの早口に巻くし立てる仕事の説明がいきなりとび込んで来る。すぐ尓は相手の話を遮り、今日はどうしても駄目だと言った。男は怒り始めた。自分が面倒見てやらないと、一家三人食って行けない癖にと言った。妻のことを、もう奥さんと言わず、名前を呼び捨てにしておいて、お前のような男と結婚させたのは間違いだったとまで言われた。尓は、踏み躙られるような痛みを覚え、他のことはともかく、妻のことを夫である自分の面前で呼び捨てにすることだけは我慢出来ないと思った。（親しいアメリカ人の間でなら普通の習慣で

も、ここは日本だ）、生きて行くことが虚しく感じられるような衝撃を、この春の陽気の中でこの男は受け留めたのだった。陰でその男が、自分の妻と逢瀬を楽しんだりすることとは、それはまったく次元を異にしていた。彼の生そのものと深く関わる畏しいものが、彼の気持を引き裂いていた。尓は、この瞬間、一秒の何億分の一かの瞬間なら妻の社長さんを殺したいと思ったであろう。しかし現在の彼はそう云う野蛮な行為を想像することさえ嫌な男であった。彼は妻に電話を代れと云うその男の話を黙ってきった。

戸外に出た後、尓は己の内部に釣針のように刺さって抜けぬある種の悲しみともつかぬ痛みがあるのを感じていた。それは動けば動く程、心の襞に深く喰い入り離れないもののような、どうすることも出来ないような様相を呈し始めていたのだった。目を醒した（彼女はすぐ後に掛って来た二度目の電話を受けて、自分の算段して来た社長さんの仕事を夫が断わり外出しようとしていることを知った）妻と、一悶着あったばかりの尓は、今満開に咲き匂う桜に「糞つたれが！」と、およそ白人の女に言えば訴えられかねない汚ない言葉を呟きながら、ソフィとの約束の場所へと急いだ。

昨日まで観光客を送り迎えしていたそのホテルのロビーで、初めて海外旅行に出る日本人のように落ち着かなかった。まだ時間に十五分はある。日本に帰って間もなく、約束の場所でもう来ないのだろうと思って引きあげたら、後で相手からたった十五分間が待てないのかと言

われて、酷く面喰らったことのある時間である。尓は待ちながら、ソフィにはどう言おう、彼女の夫にはどう話せばよいのかと、あれこれ言葉を選びながら、ソフィ達が程なく降りてくることになる紅い絨毯の幅広い階段の方ばかり見ていた。

その時、不意に肩を敲かれた。

今しがた一億分の一秒位の間殺してやりたいと思った妻の社長さんが、笑いながら立っていた。尓はこの男が、自分にこう余裕のある態度をとるようになったのは、それ程以前のことではないと思えた。少くとも、この前の観光団でしくじるまでは——。

「やっぱり来てくれたのかね。今日は英国のホッケーチームの、と言ってもアマチュアに毛の生えたような：」

尓は、この男はどんな時でも自分のことしか考えられないのだろうかと目を丸くしながら、手で遮った。この旅行代理店のおやじは、まるで未知の言語で話しかけられたような表情を作った。がすぐ、赭ら顔の肉の厚い頬に押し上げられた目が、小狡るそうな狐鼠みたいな光を帯びた。その目に、近付いてくる白い女が映った。

途端に、オウとかノウとかチカとかハウアーユーとかファインとか、あらゆる言葉が大波のように押し寄せ何が何だか分らない一種の興奮状態の中で、柔らかい白いものに、しかも息苦しくなるほど強く抱きすくめられ、彼は強い香水の匂いと遙かに遠い時間から返って来る女の体臭に、気が遠のくようであった。

「チカ、会いたかったわ、愛してる、あなたと別れて、わたし、どれほどさびしかったか、チカ、わかってちょうだい」

これはアメリカのテレビでやっている法廷からの離婚訴訟の実況中継で、夫婦が自己の言い分を主張して時には互いに罵りあい、いよいよ正式に離婚と云うことになって結論が出た後、法廷を去って行く二人が涙を流して、抱きあい、別れると寂しくなるとかこれからも好きよとか言いながら、画面から消えて行く、その時決まってアナウンサーがこんな二人がどうして別れねばならなかったのでしょうかと熱っぽく訴える、少くともそれ等以上に感動的な場面であった。

事実、尓は両眼に溢れた涙を落すまいと必死になっていた。辛うじて堪えたのは、ソフィの夫が、側で微笑んでいる、その邪気のない微笑に出会ったからである。

この時彼は、その男のことを危うく忘れそうになっていた自分に気付いた。ソフィの身体からやっと離れると、尓は彼女の紹介で挨拶を交しながら、彼と余り背丈の変らぬそのくせ倍程腕の太い男の手を数日前に捻挫した小指を気にかけながらしっかり握っていた。

会えて嬉しいとその男は言い、私もと応え、こんな場合相手が日本人でなくてつくづく良かったと思った。そして、次に子供。このような時にも順序を崩さない外国人特有のやり方に、尓は自然なものを感じながら、ロビーの隅にある水槽の前に立ってガラス越しに金魚を小さな手で打っては驚かしている子供の姿を見た。

「あなたの児は、二歳と七ケ月になるのよ」

ソフィは日本人のように微笑して言った。

そのあなたの児に、尓はびくりとした。

男は笑いながら

「私の息子は、勇敢な男だ」と言って、水槽の方へ歩いて行った。彼は笑うと、濃い髭剃り跡に笑窪が出来た。

ソフィは、また尓に身体を寄せて来て、掌を重ねて来た。尓はソフィのベッドに行く時に掌を重ねて来る夜の習慣は、仮え男が変ってもそのまま変化していないなと思いながら、多少狼狽えて、まだ立ち去らずに居る妻の社長さんの方を見た。ソフィは、あなたの側に無人島に不時着した飛行士のような顔をして突立っている男は誰かと訊いた。誰でもないと答えると、旅行代理店のその社長さんは、急に仕事を思い出した体の日本人に返って時計を見ながらせかせかと遠のいて往った。横顔に歪めた口元を故意に尓の方に覗かせながら。　（つづく）